
小夜 私の道

春風 爽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小夜 私 の 道

【Nコード】

N 3 0 3 4 D

【作者名】

春風 爽

【あらすじ】

高校生の葵と、死んだ葵の親友「小夜」。葵の不安と悲しみ、「小夜」の残してくれたコト…。すべてを守れなくても、私は生きていけるよね…小夜？

「友達が少ないのって悲しい証拠なのかな……？」

自室からベランダへ出て手すりにもたれかかる。薄暗い空を見てはため息が出でしまう。いつからこうなってしまったんだろう？ いつからつまらない自分になってしまったんだろう？ いつから……？

薄暗い空を鳥が飛んでいく。鳥は空が自分の友達だ。そして、友達の中で生きている。自分はどうかだろうか？ 私は友達の中で生きていけるだろうか？ ベランダに出ると、いつもこんなことばかりを考えてしまう。

「だから……だから嫌なんだ。もっと、強くなりたいのに……こんなこと考えて、自分で答えを出さなくても自信が持てるように……自分に自信が持てるようになりたいのに……。いつもここに帰って来てしまう……いつも、いつも……」

葵の目から一粒の涙がこぼれた。

こんな時、「小夜」だったらどうするだろう？ 私にたくさんのことを教えてくれて、たくさん言葉をかけてくれた「小夜」だったらどんなことを自分自身に言っただけ上げるのだろうか？

『強くなりたいって葵は言うけど、違うと思う。何か、もっと……葵は自分を知りたいんだよ』

『自分を知りたい？』

『そう。強くなるってことは、自分を知らないと出来ないことなんだよ。自分の事を知らないで、どんな事に弱くて、どんな事に悲しんで、どんな事に怒るとか分からないもの。後ね、強いとか、弱いとかに基準はないんだよ。みんな、自分の経験から判断しているんだから……。だから、無理なんてしないで。私、今の葵が一番好きだよ』

昔、「小夜」が言ってくれた言葉だ。もう、三年以上前のこんな

些細な会話を覚えていたなんて、自分でも驚いてしまう。

「小夜」の声が聞きたい。あの、美しい声を……。無駄な物が一つも入ってない「小夜」だけのあの声が……。あの声が聞きたい。あの声でもう一度、もう一度だけ「葵」と呼ばれたい。

葵は自室へ駆け込みまっ白な携帯電話を手にとると、「小夜」の携帯番号を押した。ツツツツツと相手を探している音がする。

「この番号は、現在使われておりません。番号をお確かめのうえ、もう一度おかけ直してください」

女の人の声が流れてきた。「小夜」とは全く違うつくられた声だ。

「違う。小夜じゃない。小夜は、小夜は……」

体全体の力が抜け、携帯電話が手から滑り落ちる。葵はその場に崩れ落ちるようにして座った。目の前に見えている窓がぼやける。目にいっぱい涙がたまり、一つの雫となつて一つ、また一つと次から次に頬に線を残して流れ落ちる。

『泣いたらダメよ、葵。私が死んでも、ちゃんと生きて……。私は……。葵のそばにずっといるから……。だから、泣かないで』

「小夜」が葵に言った最後の一言が頭の中によみがえる。

「小夜。小夜：私、怖いよ。小夜がいたから一人じゃなかった。でも、もう一人になっちゃったよ。みんな……。みんな変わっちゃって……。私一人だけになっちゃったよ……。みんな、自分を知ろうとしなくなった。人に好かれていれば、自分が安全なら人なんて関係ないって……。そんなふうになつていった……。不安だったり、苦しかったりしたらみんな逃げていく……。小夜と違って、友達が多ければ多いほど幸せで、勝ちつていうようになった。一人の友達からたくさんこのことを教わって、教えて……。それで幸せだ、って思う人が減つていった……。私もそうなつていった。いつからこうなつたんだろう……。いつからこんなにつまらない自分になっちゃったんだろう……。自分を閉じこめちゃってたのかな……。何か、さびしいよ……。私は、小夜にこんなこと教えてもらったんじゃないのに……。なのに……」

葵は顔を手で覆いながら静かに泣いた。

四年前、の「小夜」の死は、葵にとって忘れられない悲しみだ。塾の帰りだった「小夜」は信号無視の車により、あっけなく殺されてしまった。病室で葵に向けられた「生きて」というメッセージの悲しみと深さは、今になって葵の心の奥に深く入り込んできた。

正しく生きるということや、私の分まで生きてということや「小夜」は言いたかったのではない。葵が感じるままに、一つ一つを大切に、いつまでも葵らしく……

正しく生きることや、自分らしく生きるということはとても難しい。でも、今という時間を悔いのないように生きなければ、将来もつと悔やむことになる。今、生きてるということだけでも奇跡なのだから……。

「小夜、私、生きるよ。小夜みたいには出来ないかもしれないけど、自分らしく、感じるままに……」

葵はベランダに出ると手すりにもたれかかった。目じりに残った涙が、夜空に光る星のように光った。

今を歩む道が必要なら、過去を振り返る道も必要だ。 unnecessary 道なんて、選べない道なんてないのだから。

小夜、私はあなたの中で上手に生きていますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3034d/>

小夜 私の道

2011年1月16日01時30分発行